

紛争の空間と時間

動員と介入のマルチエージェント・モデル

慶應義塾大学総合政策学部4年

澤田寛人

かつてヴェーバーは、近代国家を「ある一定の領域の内部で・・・正当な物理的暴力行使の独占を(実効的に)要求する人間共同体である」と形容した。しかしながら、少なからぬ数の国家が、この「近代国家の本質」を備えていない。紛争の拡大や継続期間に関する研究の蓄積は膨大であるが、国内紛争の研究の主要な分析手法であるゲーム理論と計量分析は、それぞれ方法論的な問題を抱えてきた。そのため本稿は、これらの手法の限界を乗り越えるための方途として、マルチエージェント・シミュレーション(Multi-Agent Simulation: MAS)を導入する。

本稿は、国内紛争の拡大と継続期間に関する主要な論点(「民族」の紛争への影響と、国内紛争への国際的な介入の影響)から、以下の二つの問いを設定した。すなわち、①集団の空間的分布は、紛争のマクロ・レベルへの拡大に影響を及ぼすか。また、そうであるならば、それはなぜか②政府を支持する軍事的介入を伴う紛争よりも、反政府勢力を支持する軍事介入を伴う紛争が短期に終結するか。また、そうであるならば、それはなぜか、という問題である。

「動員」と「武力闘争」というメカニズムから成るモデルによって検証を行い、次のような結果が得られた。①-a.同数の「少数派」民族を、領域上に(ある程度)「まんべんなく」分布させた場合と、領域の一部に集中させた場合では、後者において紛争が拡大しやすい(図1)、また、①-b.「多数派」の数を一定に保ちつつ、「少数派」の中でさらなる多様性を生み出すと、特定の状況下では、紛争の拡大が抑制される(図2)。また、問い②に関しては、②-a.「政府に対する支援モデル」と「反乱に対する支援モデル」を比較すると、後者において紛争の短期化及び頻発の傾向が強い。また、②-b.「反乱に対する支援モデル」においては、介入のタイミングが早ければ早いほど、紛争が短期間で終結する。これらの結果は、①-c. 集団の局所的な集中の影響(反政府勢力が反乱の初期段階で、強固な基盤を築けるか)の大きさ、②-c. 全く同様の行動を想定しても、これを「いつ、だれのために」実行するか、という問題の重大さをそれぞれ導く。



図1. 分散モデル(左)と集中モデル(右)の民族分布

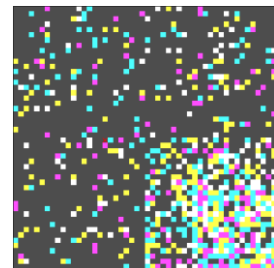


図2. 多様性モデル